

優秀賞

いのち



私達は、今を大切に生きているだろうか。明日は必ず訪れると何の疑いもなく信じてはいないだろうか。「いのち」と聞いて何を思い浮かべるだろう。

人間だけでなく、生あるもの全てにとって「死」は必然的に訪れるものである。むしろ一日一日生き続けていることの方が偶然であるといっても過言ではない。しかし、人はなぜ必然であるはずの死を悲しみ、自らの死におびえるのか。その一方で、簡単に多くの命を奪ったり、自ら命を絶つたりする人もいる。「命は大切に」とか「命の大切さを考えよう」などと人はよく言う。しかし、テレビをつけると、事件や事故に巻き込まれて人命が失われたというニュースをよく目にする。そんなニュースも、過ぎ去っていく日々

鹿島中学校 三年

萩原 琉月



の中で次第に人々の記憶から消え去ってしまう。その事件や事故の裏でどれだけ深い悲しみが、悲痛な叫びがあったかなど誰も知らずに。多くの人々は、そういったニュースと自分は無縁だと思っているのだろう。

私の母は、私が小学四年生の冬に帰らぬ人となった。私が母の病気を知ったのは母が亡くなる数日前だった。私はそれまで、母に面と向かって「ありがとう」と言ったことがあまりなかった。恥ずかしく、「今度でいいか」という気持ちもあつたからだ。しかし、母にはもう面と向かって「ありがとう」と言うことはできない。別れ際ですら言えなかった。私はどうしてあの時に一言「ありがとう」が言えなかったのだろう。簡単なことなのに。

生きてさえいれば何でもできる。一緒に笑い合うことも、話し合うことも、たわいもないことでケンカすることも。しかし、死んでしまったらもう、そばにいることも、「ありがとう」と言うこともできなくなる。命はその持ち主だけのものではなく、家族や周りの人にとっても大切でかけがえのないものであるということを知った。命とは現在、過去、未来を繋ぐ存在であり、またそれらがあつてこそ存在できるものである。また、その命にかかわる全てのものがあつてこそその命であると思う。

今、世の中で問題となつている新型コロナウイルスによる死者は何十万人だという数字だと聞いた。このように膨大な数字で表されると実感がわきにくい、この一つ一つの命に歴史があり、夢や家族、生きる理由があつたはずだ。みなさんにも生きる理由があるだろう。けれども命は儂く、いつ散るかわからない。生きるということは奇跡が続いているようなもので、明日も生きていくという保証はない。毎日どこかで事件や事故が起きている。新型コロナウイルスなどの病気がある。日本の自殺件数が多い。命は儂いもので、弱いものだ。だからこそ大切にする。

人は、いつ死ぬかなんてわからない。だからこそ自分の思ったことはその時に伝えなくてはならないと思う。二度

と相手に伝えることができなくなってしまうかもしれないから。私たち人間にとつて一番大切なことは生きることだ。簡単に「死にたい」という人もたくさんいる。しかし、どんなに辛いことがあつても、前を向いて生きていくしかない。誰も「死」を予測することはできない。明日死んでしまうかもしれない。どれだけ生きようともがいたつて、結局いつかは死んでしまう。私にだって、皆さんにだっていつ死が訪れても不思議ではない。それでも、私たちは必死に生きて、たった一つの限りある命を一分一秒後悔しないよう精一杯生きていかなくてはならない。

母が帰ってくることはもう二度とない。しかし、私の思い出の中で生き続ける。だから私は、これから母の分も大切な命を生きていこうと思う。

